

## 最高学部 「自由学園美術の集大成としての自覚」

滝沢 具幸

最高学部のリベラルアーツ教育は、単に知識の量を求めるのではなく、人間の生地を織り、生活の質を高めるための叡智を求めることを目的としています。各々が属する社会を良くする使命と、そのために求められる課題に応える意欲と能力を培う自由学園教育の最終課程です。自由学園の豊かな自然の恵みの中で育まれた感性を生かし、日々の生活の中からの発見と創造に満ちた最高学部生の作品をご覧いただければ幸いです。

(最高学部長・大貫隆 一会場内あいさつより)

最高学部の美術は、自由学園の一貫教育の集大成として培われた感性と美意識の上に、各々主体性をもって自身の表現・創作を行うことを主眼としています。そのために幅広い分野の知識を学び、柔軟な発想と創作意欲を生む生地を作らなければなりません。また、学部のゼミや自主研究・卒業研究など、他の教科と関連する授業の中で、美術が日々の生活や社会に果たす役割を理解し、実践してゆくことが大切であると考えています。

(滝沢具幸 一会場内あいさつより)

### 展示内容について [美術]

・日本画/デザイン (1年) 滝沢具幸  
絵画、デザインをとおして造形表現の基礎を学び、表現する喜びを知り、日常に美を感じ発見する目と心を養うことを目指している。日本画では基礎技法及び素材の知識を学び描いた「ユリ」「ペゴニヤ」など、また「学園の風景」「合作」のほか「墨で描いた作品」を発表した。  
デザインでは色彩の学習、分割、平面構成などの基礎を学んだ。無彩色によるさまざまな構成、色彩による「応用構成」など、美しい作品を発表した。それぞれが新鮮な視点で学ぶことができた。

・日本画 (2 - 4年) 清野圭一  
1年次に学んだ基本の上に、金銀箔の技法を学び、30号など大きめの画面に各自が自由なテーマで制作した作品を展示しました。テーマ選びから良く考え、描写することよりも各自の独自の表現を深めることを目指しました。  
廃材置き場をモチーフにした作品では樹木と廃材となった木材のコンテナとの対比が象徴的に描かれ、それを見る人間の内面が高いレベルで表現されていました。

・デザイン (2年) 河原弘太郎  
各自が選んだ本に新たな装丁を施す作業から、「文字言語による世界をいかにビジュアル化して伝えるか？」を考えた。それぞれ文庫サイズのもの

デルを制作し、コンセプト文と共に展示した。

・油絵 (1 - 4年) 武藤岩雄  
一年生は学園の風景を描き、高学年の人達は静物や風景をもとに創作が入り、画面の展開を図った。静物を実際に設置して、どのような見方で画面が展開されたかを示す展示も行った。  
飾ってみると今後どのように指導をすればよりよくなるのか、しさんに富んだ内容だった。それはモチーフに執着し、満足がいくまで妥協しないで描くことであり、特別にそのシーンを感じ取りその人の表現で描くことが重要だと感じた。

・立体 (1年) 古川武彦  
空間にどう存在するかをさまざまな角度から追求します。出展のベンチの素材は学園内の樹木を利用し、構造的強度、美しく使いやすさを大切に全員でデザインを考え、話し合いの結果三案を合作することに決定。板材を面と考えて、空間を裁断し、空洞を含む量を感じる表現となりました。  
器の作品は、木の塊から彫り、研ぐことで、自然の妙味を生かし、量が空間に発散し、空間に量の美しさと立体感を表現しました。

・立体 (2 - 4年) 宮井恵子  
誰が何の目的で使うものかを考え、その空間を意識した自分のデザインを形にする。何材か、どんな木目なのか、判断し難い状態の木材から、木

取り・製材・組み立てと進めていく。削る・切る・打つなど、次第にイメージしたものが見えてくる。そして更に、塗り上げると想像以上に仕上がり、喜びも大きい。丁寧にしたもの程感じられる、そんな作品となった。

今回は、間伐材の利用として生まれた、木材を紐状にしたものを巻き込み、それを立ち上げて作る方法で、器作りもした。木屑の出ない、木の有効活用の一つだ。木の活用法も様々にあることを知る機会となった。

〔主な作品〕本棚、小テーブル、ベンチ、スリッパ置き、写真立て、モビール、ブナ材紐利用の器

・陶芸（1年） 堀切由紀子

土練りに始まり、手びねり（掘出し・ヒモ作り・タタラ製法）の基本的技法を学びつつ、デリケートな土、作品の管理をしっかり身につけてもらいたいと思っています。その上で、後期のろくろ制作まで経験することで、陶芸の造形の深さ、おもしろさを知り、2～4年までの美術へ繋がってほしいと思っています。

〔主な作品〕F・L・ライトのイメージの陶板プレート（H21）、自然の器（H22）、F・L・ライトのイメージの陶ランプ（H23）、食器：揃い鉢、平皿、大鉢（H24）

・陶芸（2～4年） 吉田文代

学園の中で生まれた1人1人の感性を土という素材を用いて、見える形に表現することを目指している。そして、それが生活の空間をゆたかにするものであってほしい。

今回の美術展では、身近な学園の自然の中から自分の好きなモチーフを選び、それをどのように表現できるか考えた。それらをデフォルメした形や絵付け、また陶板等でイメージを表現した。1人1人の考えと工夫がみられる個性的な作品を出品することができた。普段は個人制作が多い中、合作は互いの長所を出し合い協力するよい機会になった。自分達（23年度4年生）の卒業式で使いたいと花器を制作、実際に使うことができたことも今までになかった経験になった。ツールは現在学部の庭に置かれている。

〔主な作品〕学園の自然：ランプ、陶板、蓋物、

テーブルウェア等 合作：学園の為の花器、学部生が使うツール

・染織（1年） 五十嵐富美  
「布を織る喜び：テトラクッションと鳥のイメージのストール」

初めて染織に取り組む人たちが、学部としてお客様に見ていただく作品を製作し発表する。自身の図案に合わせて素材を選び糸の量を計算し、染織し、一段一段織りすすめ、丁寧に仕上げをして。膨大な時間の積み重ねで布が完成する。この初めての経験の喜びが自然に伝わる作品になったことと思う。今回はテトラ型に縫ったり、斜めに段をつけて織ることで、形の面白さも体感することができた。2年以降に続く制作意欲を育てることを心がけているが、今年は成功したようだ。

・染織（2～4年） 田村満恵

学2は、ストライプと幾何学的構成によるデザインを考えラグを制作した。学3・4は、各自の追求したい作品をデザイン、試作、本制作と進め、ラグ、服地、植物染色の布によるインスタレーション、ローケツ染などに取り組んだ。染織の制作には、多くの時間と集中力が必要である。美術展準備等と平行して忙しい中、暑い夏休み中もそれぞれが、時間を作り努力して制作に励んだ。寺村祐子先生による植物染色の特別講義で染めた糸による作品も制作、図書館で使われている。

〔つながる学び〕

・被服学（1～4年） 田村満恵・加地泰子  
洋裁に関する様々な素材にふれ、技法を体験することにより、衣服に対する見解や興味を深めつつ学んでいます。平面の生地を立体に仕立てた時の形を思い描くことは、洋裁をする時の楽しみでもあり、難しさでもあります。今回はテキスタイルの勉強として、美術の先生からご指導をいただき絹地にステンシルをしました。

デザインを考えステンシルの型を制作し、配置と配色の試作を練る。試作を繰り返す事で型紙のどの位置に配置すると効果的なのかを考えることができました。色彩の配置も何度か試作して決定した物を絹地に染めました。絹地は普段は扱いな

れないため、縫製には大変苦労しましたが、型を作って染めていく工程から縫製まで、衣服が作られる流れをいつもより長く体験することができ、正に一点ものの作品が完成しました。

・ベンチグループ 大塚ちか子・宮井恵子

2009年度から始まった自主研究「ベンチグループ」および「木を活かす・手作りベンチの更新と循環」の活動内容と成果報告を行った。植林地→木材搬出→製材→ベンチのデザイン→制作→地域への設置まで一連の過程をパネルや記録ノート、今年度制作のベンチや模型で見えていただいた。

また、製材されたままの木材と実物のベンチを並べることで、木が変化し、循環していく様子を視覚的にも伝えられたと思う。

#### [ゼミ研究発表]

・数理モデルとインターフェイス

遠藤敏喜・大柳陽一・濱中翔

1F: 「間伐材を活かす椅子」の研究で制作したモデルの椅子10脚を展示した。来場者には、実際に座ってもらい、それぞれの座り心地を体感していただいた。併せてアンケートも回収し、今後の研究につながる展示となった。また、2階の展示と連動し、研究の詳細は2階教室に展示された。

2F: アートはアトリエだけから生まれてくるわけではない。数理工学のクリエイティブな「知」の表現行為もまたアートとなりうる。本展示は、数理モデルとインターフェイスゼミの日頃の研究活動の流れを切り取り、過程をアートとすることを目指した。

「Process」をコンセプトとして5つの作品で会場を構成した。パネルシステムは天井からテグスでパネルを吊るす懸架式を採用し、設置や撤去の所要時間の短縮をはかった。

[主な作品] アーカイブ展のアーカイブ、間伐材を活かす椅子、自由学園らしさを表現した光フォント(Rokkaku-Sans, Sankaku)、幼児生活団「れいすいまさつ」アニメーション映像、頭上のハミルトンリズム

・人間形成と教育 咲花昭嗣・酒本絵梨子

「JIYU アフタースクール」をフィールドとした

卒業研究(H24)の内容と活動報告を行った。「合作が子どもたちにどのような影響を与えるか?」を、実際の看板作りを通して考察した。

[主な内容] アフタースクール看板、解説パネル

・ライフスタイル 中村祐二

卒業研究「自由学園のブランド拡大のためのマーケティング研究」から、その概要と学外に発信する手段として考えたツールの提案をした。

研究内容はパネルにまとめ、実際に制作したモデルと併せて展示発表した。

[その他の内容] 卒業研究: 自由学園における道具・生活環境の再考 生活とデザイン: 学部の昼食にふさわしい食器、しのもめ寮のロゴマークデザイン、看板の制作

#### [有志参加]

・羊皮紙に聖書を写本する会(1-4年)

酒本るみ子・酒本絵梨子

聖書は毎朝の礼拝で読む本であり、生活の中心である。その聖書の歴史を繙いていくと、ギリシア・ローマ時代に用いられていた獣皮紙の聖書にたどり着く。当時の道具である羽根ペンと獣皮紙に馴染みやすい虫こぶインクを用いて、羊皮紙に各自好きな聖句を写本した。インク作りからテンペラ技法による着彩まで、自然の材料と向き合い、先人の所作が手に下りてくるような優美な制作の時であり、改めて聖書と向き合う時となった。

#### 準備について

・美術展の運営

奈良忠寿

リーダー学年の2年生を中心に、学部生全員で運営を担った。準備中は、各常務で打ち合わせた内容を共有するために、会議ごとに記録を回収し、常務リーダーが一覧化し配布し、各係りの工程も一覧表にし、共有した。

リーダーが学部生全員の予定と各係りの必要人数を把握し、期間中1日は休むシフトを組もうとしたが、結果的に学部1年生以外は休みを取ることができなかった。また、急に人が必要になった場合に備え要員を確保し、必要に応じて動員した。

学生は、要求されたことに対し情報を共有して運営することを学んでくれたことと思う。